
記憶

祇諳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶

【Nコード】
N4221J

【作者名】
祇諳

【あらすじ】
昔の記憶。おぼろげな痛み。

向かい合う椅子で会話をする。棚に置かれた蛙のぬいぐるみを見て、ぼつりと少女が言った

「蛙は可哀相ですね。」

「可哀相、とは？」

ぼんやりと窓の外を眺めていた男はその唐突な話に首を傾げた。

「某の実験に使われるのは蛙でしょう。痛がるつにと思って。」

俯き加減に自らの腕を見ると、ゆっくりと椅子から床に腰掛けた

「理科の教諭の貴方なら解剖の経験くらいお在りでしょうに」

少女は視線を反らさずに男の顔を見る。

男はすこし首を傾げて苦笑した。

おもむろに棚にあった蛙を手に取ると再び椅子に座り直し、蛙を膝の上に置いてくすつと笑った。

「蛙には痛覚はないよ」

膝に置いた蛙は彼のお気に入り。

北の地を踏むのに、別れ惜しくなると連れてきたという。

「蛙は痛くないんだよ」

ニコリと笑って男は少女を見た。

少女は少し考えて、言葉を重ねる。

「痛くないって思うのは、痛いって、言わないからでしょう。」

「え……?」

「人間みたいに、「イタイ」って、言わないから、痛くないって思うんでしょう?」

首をかしげて少女は言う。

男は少し戸惑ったように目をくるりと丸くした。

「植物だって、刃物を向けると何かしらの反応を示すという研究がなされているし、蛙だってメスを入れたらビクリと反り返るでしょう。」

少女はゆっくりと語りながら男の膝の上の蛙を撫でる。

「それは、痛いつて、ことじゃないのかな。」

男は伏し目に彼女を見て、小さな声で呟いた。

「そうかも……、しれないね」

ぽかりと開けた蛙の口をもこりもこりと動かしながら、少女の顔を眺めていた。

あの目は何を考えていたのだろうか。

大人になってしまった私は思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4221j/>

記憶

2010年10月16日18時37分発行